

日本語教員養成科目におけるオンラインブレンディッド学習の実践

伊藤（横山）美紀（北海道教育大学函館校）

Online Blended Learning in Japanese Language Teacher Training Classes

Miki Yokoyama Ito, Hokkaido University of Education Hakodate

要旨：本研究では、日本語教員養成科目で実践したオンラインブレンディッド学習を考察する。対象とする実践時は、オンライン学習環境が十分に整備されていない緊急遠隔下であった。パソコンを中心とした情報機器やソフトウェアの操作への苦手意識をもっている学生もいたが、本実践ではオンラインツールを積極的に導入した。本研究で実践し収集したデータの範囲内では、学生はオンラインの便利さに気づき、学生がオンライン授業に抱くイメージに良い変化がみられた。本研究の結果から、オンライン学習環境が決して十分ではない場合や、実施可能な同期型授業の回数が少ない状況においても、学生の満足度や学びの質を向上させられる可能性が示唆される。

キーワード：養成、eラーニング、ブレンディッド学習、オンライン

1. 目的

本研究では日本語教員養成関連の科目で実践したオンラインブレンディッド学習を考察する。本稿において、「ブレンディッド学習」は「ブレンディッドラーニング」と同義とする。ブレンディッド学習には様々な定義があるが、本稿では藤本（2019）による「インターネットやパソコンを使い、様々なメディアやツールを組み合わせで行う eラーニングの手法の 1 つ」を用いる。本稿で扱う実践は完全オンライン環境下で行ったため、「オンラインブレンディッド学習」と呼ぶ。Zoom を用いた同期型授業を 3 回のみ行い、それ以外は非同期型で行った授業の成果と課題を、学生に行ったアンケート結果から考察する。

2. 実践について

2.1 対象

本研究では、2020 年度前期に行った A 科目と、同年度後期に行った B 科目に触れるが、B 科目を主な考察対象とする。A 科目は 2 年次以上を対象とした科目である。B 科目は 1 年次の履修が推奨される、日本語教育学に関する基礎的知識の修得を主な目標とした講義の割合が多い科目である。A 科目を履修するために、学生は先に B 科目を履修済みである必要がある。B 科目の実践を行った経緯を示すため A 科目の内容の一部にも言及する。

2.2 内容

2020 年度前期の A 科目は演習重視の科目であるにもかかわらず、初回から非対面授業

となった。2019 年度まで A 科目では部分的にオンライン支援システムを活用しつつも、教案指導と模擬授業を主に対面で行っていた。2020 年度も、授業の目標と内容自体に大きな変更は加えず、Zoom を用いた同期型授業で個別の教案指導と模擬授業を行った。教科書の予習範囲の理解確認は、各自がオンラインで小テストに取り組むことが可能な Quizalize を用いて非同期型で行った。用紙で行っていた学びの振り返りは Slack 上で行い、履修者間で学びを共有したものの、SAMR モデル（Puentedura 2010）に照らし合わせると、ほとんどが Substitution（代替）にとどまった。オンラインでスケジュール調整が可能な Calendly を利用することで追加の教案指導を希望する学生がアポイントメントをとりやすくなったという利点はあったが、量的に十分に活用されたとはいえない状況であった。

このように、前期の A 科目では代替としてのオンラインツールの利用が目立ったが、A 科目での筆者や学生の経験を踏まえ、後期の B 科目では、Zoom を用いた同期型授業を 3 回に減らした。B 科目は、もともと講義要素が多い科目であり、非同期化がしやすかったことも、その理由の一つである。さらに、所属機関の方針により、学生の移動時間の確保のために、2020 年度の後期授業では、対面授業と遠隔授業のいずれにおいても開始時間を 10 分遅らせ、終了時間を 10 分早め、不足分は非同期型の課題とする必要があった状況も考慮した。

2020 年度後期の B 科目においても、主な連絡と情報共有には Slack を用いた。Zoom を用いた同期型授業は、交流活動と意見交換活動を中心に、2020 年 11 月、12 月、および 2021 年 1 月に 1 回ずつ行った。活動には、Zoom のブレイクアウトルーム機能や Padlet やグーグルドキュメントの共同編集機能を用いた。11 月の Zoom 授業で、学生は、10 月の初回授業から数回にわたって Slack や Padlet を用いて文字で行ってきた情報をいかし、さらに情報交換を行った。12 月の Zoom 授業では事前に各自で取り組んだ日本語教育哲学を考える課題をもとに、小グループで意見交換を行った。1 月の Zoom 授業では、最終レポート課題に取り組むためのブレンストーミング活動を行った。以上の 3 回を除いた授業は、従前から採用していた指定教科書（荒川 2016）を用いて非同期で行った。事前の教科書の予習にかかわる理解確認は A 科目でも使用していた Quizalize で行い、フィードバックや補足説明や課題の説明はグーグルスライドにまとめ、Loom で解説を録画し、配信した。学生は、1 週間に 1 度、学びの振り返りを Slack に投稿した。Zoom を実施しなかった週の授業時間は、担当教員に他の業務が入らない限りは、Calendly を用いて、希望する学生が個別に Zoom でアクセス可能な状態に設定した。

2020 年度後期は、41 名の学生が B 科目を履修した。参加度は Slack への振り返り投稿で記録し、3 回の Zoom 授業への出席は任意としたが、1 回目の Zoom 授業には 28 名、2 回目の Zoom 授業には 36 名、3 回目の Zoom 授業には 34 名の入室があった。

3. アンケートの結果と考察

本節では、B 科目で実施したアンケート結果を考察する。B 科目では、授業の開始時と

終了時にグーグルフォームを用いて非同期形式でアンケートを行った。開始時のアンケートは、2020年10月1日から2020年10月8日に、終了時のアンケートは2021年2月1日から2021年2月9日かけて実施した。いくつかの質問は、両方のアンケートで尋ねた。B科目の履修学生41名のうち、開始時アンケートには39名が回答し、終了時アンケートには14名が回答した。2つのアンケート間の回答者数が異なるため、背景情報として、今後の対面授業の実施希望についてのそれぞれの回答結果を示す。図1は開始時アンケートの結果で、図2は終了時アンケートの結果である。質問はいずれも「できるだけ早く、「もとどおりの」対面授業に戻ってほしいと思う」であり、5は「そう思う」、1は「そう思わない」である。図1および図2のいずれの回答者においても対面授業へ戻ることへの希望に対しては大きな偏りは見られず、多様であることがわかる。

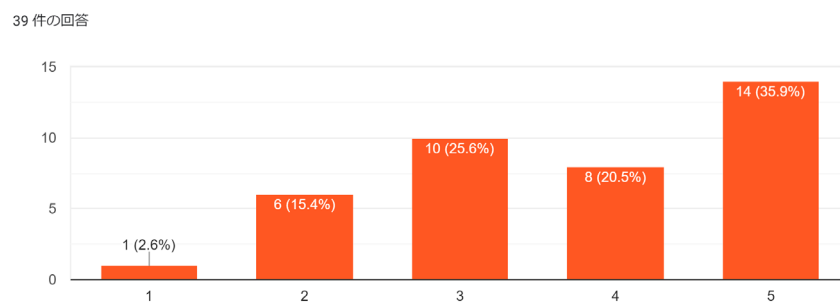


図1:「できるだけ早く、「もとどおりの」対面授業に戻ってほしいと思う」(開始時)

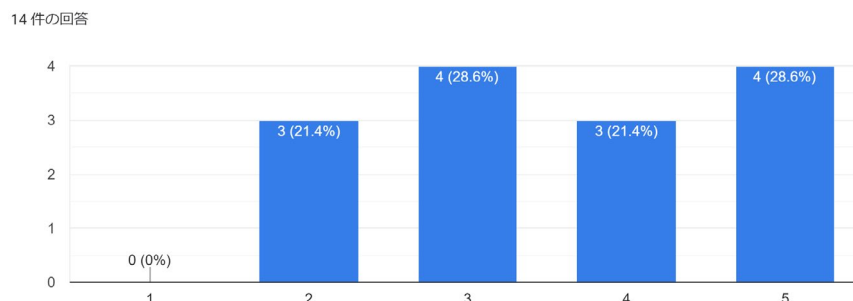


図2:「できるだけ早く、「もとどおりの」対面授業に戻ってほしいと思う」(終了時)

次に、情報機器の操作に対する苦手意識に関する回答を示す。図3、図4および図5はいずれも終了時アンケートの回答結果であるが、図3は2020年度の非対面授業の開始時、図4は2020年度10月の後期のB科目開始時、図5はB科目が終了した2021年2月当時について尋ねた結果である。いずれの図においても5は「そう思う」、1は「そう思わない」である。2020年度の約10か月間を通じて、情報機器の操作に対する学生の抵抗感が減ってきており、情報機器の操作に対する苦手意識については改善傾向がうかがえる。

学生からの記述回答においても、「ツールを使いこなすのが難しかった」という困難さへの言及もあったが、「たくさんのツールを同時に使うことで、乗り越えたという達成感を得た」といった、授業の満足度につながっているとみられるコメントも見られた。

14 件の回答

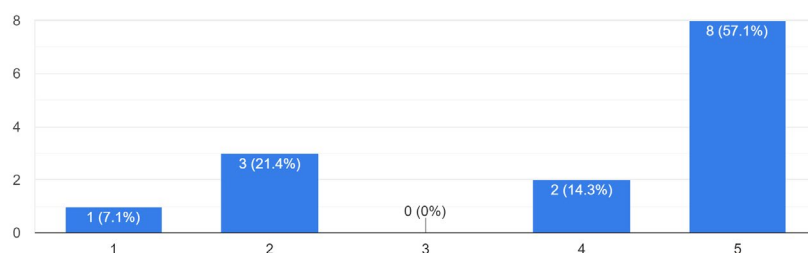


図 3 : 「2020 年度 4～5 月の年度開始時、機器の操作が苦手だった」

14 件の回答

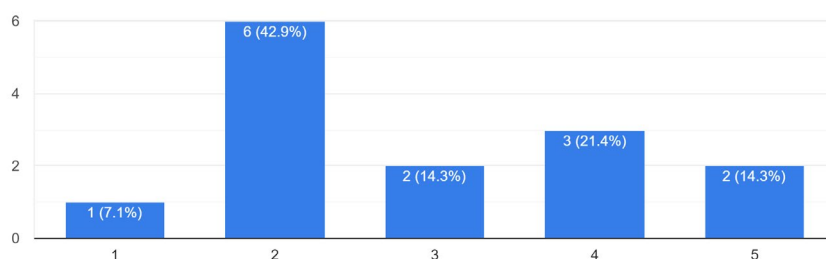


図 4 : 「10 月の授業開始時、機器の操作が苦手だった」

14 件の回答

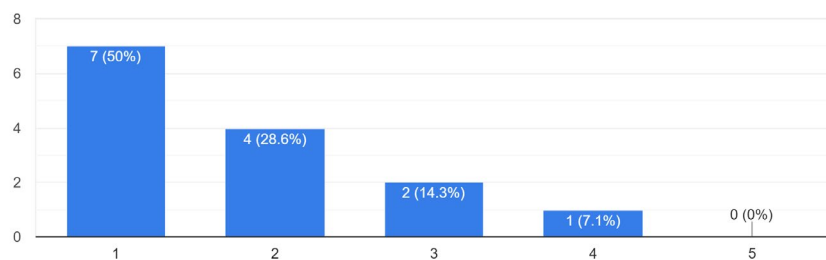


図 5 : 「10 月の授業開始時と同じくらい、今も機器の操作が苦手だ」

次に、学生に「オンラインで友達が作れる」と思っているかどうかを尋ねた結果を示す。図 6 は、2020 年 10 月の B 科目開始時の回答である。「そう思う (5 または 4)」と回答した学生は、全体の 15.4%であった。

39 件の回答

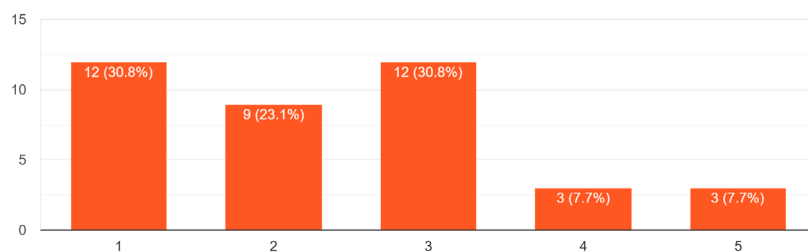


図 6 : 「オンライン授業で友達が作れる」(開始時)

これに対し、図 7 の B 科目終了時の回答で「そう思う（5 または 4）」と回答した学生は、全体の 42.8%に増加した。しかし、人数で見ると両方とも 6 名である。回答者数が開始時アンケートでは 39 名であったのに対し、終了時アンケートでは 14 名であったため、友達が作れると思うようになった学生が本当に増えたかどうかは、今回のアンケートでは明らかにならなかった。

14 件の回答

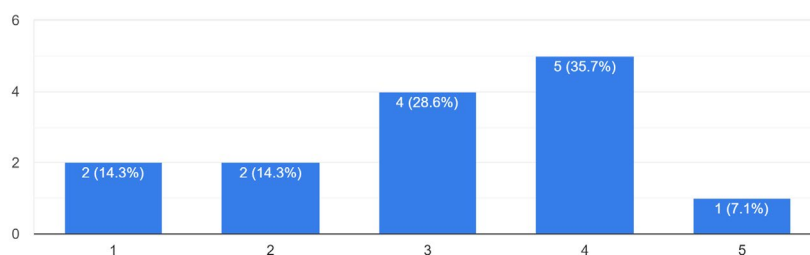


図 7:「オンライン授業で友達が作れる」（終了時）

ただし、実際にこの授業をきっかけとして新しい友達を作れた学生はさらに若干名であったものの（図 8）、図 9 が示すように、「この授業をきっかけに、すでに友達だった人とのつながりを継続したり深めたりすることができた」に「そう思う（5 または 4）」と答えた学生が、9 名いた。この人数が、図 7 で「オンライン授業で友達が作れる」と答えた 6 名を超えていることには注目したい。

14 件の回答

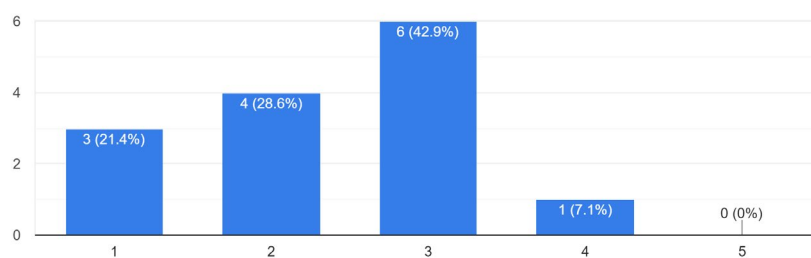


図 8:「この授業をきっかけに新しい友達を作れた」

14 件の回答

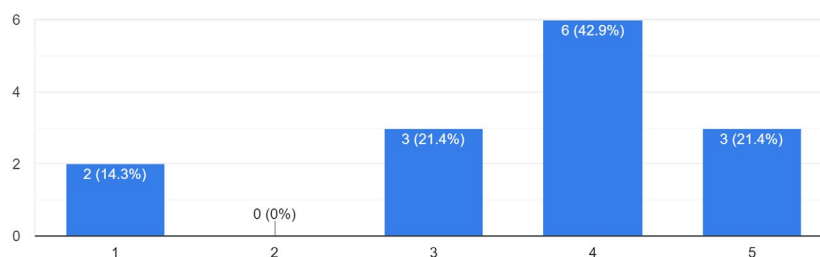


図 9:「この授業をきっかけに、すでに友達だった人とのつながりを継続したり深めたりすることができた」

その他、終了時アンケートでは「この授業では自分がこの授業の一員として参加する楽しみを味わうことができた」「Slack でみんなの投稿をみて言葉遣い等の勉強ができた」といったコメントもあり、同期型授業が 3 回のみでも様々な学びや達成感を得た学生がいたことがわかった。

4. まとめと今後の課題

本実践では Zoom を用いた同期型の授業を 3 回のみ行い、それ以外では Slack や動画を用いた非同期型の授業を行った。アンケートの結果から、学生の情報機器の操作に対する苦手意識の程度は多様であったことがわかった。また、収集したデータの範囲内では、情報機器の操作が苦手と回答する学生は減少する傾向を示し、オンラインの便利さに気づいた学生や、オンライン授業で達成感を得た学生もいた。

実際にこの授業をきっかけとして「新しい友達を作れた」学生は、「オンライン授業で友達ができる」と回答した学生ほど多くはなかったが、すでに友達だった人のつながりを深めることができた学生が一定数いたことがわかった。学生の日本語教育ビリーフへの影響を考えると、オンライン授業で友達ができるという実感をもてたこと自体にも、すでに友達だった人とのつながりを深めることができたことにも、一定の意味があったと思われる。本研究の結果から、同期型授業の回数が少なくても学生の満足度や学びの質をある程度向上させられる可能性が示唆される。

本研究では、授業開始時と比較すると、授業後のアンケートにおいて十分な人数から回答を収集できなかった。また、インタビュー調査等による質的な考察も必要である。2021 年度からは、所属する教育機関においても Google Classroom が導入され、オンラインブレンド学習を行う環境が改善しつつあり、授業内容や方法も大幅に変更しているところである。引き続き、これらの実践の成果と課題を多視点的に考察していく必要がある。

謝辞

本研究は科研 19K21803 の助成を受けたものです。

アンケートに協力して下さった学生みなさんに、心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 荒川洋平. 2016. 『日本語教育のスタートライン』. 東京: スリーエーネットワーク.
- 藤本かおる. 2019. 『教室への ICT 活用入門』. 東京: 国書刊行会.
- Puentedura, Ruben R. 2010. *SAMR and TPACK: Intro to Advanced Practice*. 2021 年 6 月 21 日閲覧. http://hippasus.com/resources/sweden2010/SAMR_TPACK_IntroToAdvancedPractice.pdf